

行く春を惜しむ



夕工山葉

娘の大学進学が決まった。

成績も割合い優秀で課外活動にも積極的だった娘は、教師の評判も良く、すんなり地元の大学へ推薦入学が決まったのだ。一人暮らしをさせる必要もないので、余計な心配をしないで済むし、経費節減も見込める事となり、女房はほくほく顔だ。俺としても、この家で女房と二人っきりになるのは、どうにも気詰まりなのでホッとしている。このまま就職も地元でしてくれれば有り難い。

娘はすっかり緊張の糸が切れ、入学までの自由な一時をどう過ごそうかと、あれこれ計画しているようだ。

俺が大学に進学したのは、もう三十年も前の事。今の豊かで洒落た大学生とは雲泥の差がある貧乏学生だったが、あれはあれで楽しかったと今でも思う。「バンカラ」と言う言葉がまだ死語になっていない時代、周りの友人は皆朴訥で野暮で田舎者だった。

大学の三年間は、付属の男子学生寮で暮らした。四年になる頃、その寮が閉鎖される事になり、已む無く学生向きの安アパートへ引越しをしたわけだが、そうでなければ卒業までその寮に住んでいた事だろう。先輩がほとんどいなかったのも、居心地が良かった理由の一つだ。

その学生寮は、戦後に建てられたボロボロの木造二階建てで、一階に五部屋と食堂、応接室、風呂、洗濯室、管理人室、公衆電話が有り、二階に五部屋と自習室、談話室、物干し場があった。トイレと洗面所は一、二階共に有った。

一部屋に二人で暮らすので、二十人ほどの寮生がいたのだが、俺は二階の部屋に住んでいたせいで、一階に住んでいた寮生とはあまり接触がなく、三年も同じ寮に住んでいながら、名前と顔が一致しない学生が何人かいて、学内で挨拶されても、誰だか分からず失敬な態度を取った事もあったのは、我ながら申し訳なく思っている。

部屋の窓は二重とは言え木枠で、すきま風かヒューヒュー吹きこみ、壁は安普請で隣室の宴会は丸聞こえと言う、いかにも貧乏臭い寮ではあったが、何せ一日二食付いて一ヶ月の寮費が三万円だったのだ。電気、水道代も込みで、冷房は無かったが暖房だけはセントラル・ヒーティング。小さいながら共同風呂もあり、飯のオカズは美味くはなかったが白飯と味噌汁だけは沢山食べられるので、貧乏な家の子どもとしては、文句は無かった。

寮生の部屋は八畳の和室で、一間の押入れと左右の壁に半間ほどの、衣服を掛けられる吊戸棚があった。窓の下には文机が二つ並んでいる。文机なんて、今の若者には何の事だか分からないだろうか。座って物書きをする為の木で出来た小ぶりの机で、真ん中に薄っぺらい引き出しが二杯付いていた。部屋の備品は、この文机と天井のサークルライトと煤けた灰色のカーテンのみだ。

寮に入る際に持ち込むよう指示された物は、布団類、ポット、マグカップ、洗濯・洗面道具、三段ボックス、デスクライト、底がフェルト製のスリッパだったと思う。底がフェルトのスリッパというのは、音がしなくて滑らないかららしかったが、音はともかく、床も階段もツルツルの木で出来ていたので、滑ること滑ること。履かない方が良かった。

寮暮らしが快適かどうかは、同室の相棒との相性で決まる。

俺と同室になった相棒は、学校側の配慮なのか同郷の学生で、入寮初日から地元の話で盛り上がり、すぐ友達になれたのは幸運だった。

その相棒の名前は三沢貴明と言い、俺の名前は八重樫浩司。二階の真ん中の部屋、十号室に住んでいた。日本では四号室や九号室は、ゲンを担いではずす習慣があるが、この寮でもご多分に漏れず、その番号の部屋は存在しなかった。

三沢は面白いくらいに女に対して免疫の無い男だった。

そう言う俺も、金属工学科に進学したので、学内で女の子と話す機会なんてほとんど無かったのだが、高校は共学だったので、女の子を見ただけでクラクラするなんて事はない。進学してしばらくしてから見つけたバイト先でも、同僚の女性職員と話すのは、苦痛でも無ければ特別な喜びでも無かった。しかしながら三沢は男子高校卒だったのである。

中学生の時も、クラスの女子とろくに話した事が無かったようなので、彼は自分が最後に身内以外の女性と個人的会話を交わしたのが何時なのか、最早思い出せないらしかった。そんな訳で三沢は、事務局の女子職員と話す時さえ、真っ赤な顔をしてシドロモドロになる、純情な野暮天だったのだ。

本人に女に対する免疫が無いとしても、こいつの見た目が二枚目なら周りの女性が放って置かなかっただろうが、勿論こいつは二枚目ではない。ひょろりと痩せた肌の浅黒い男で、分厚いレンズがはまった大きな黒いセルのメガネを掛けていた。言い様によっては、品が良いと言えない事も無い細面の顔には、小さなパーツが整然と並んでいて、日に焼けた男雛の様な面相に、中途半端に伸びた長髪が鬱陶しい。背はそれほど高くなく、動き方がどことなくギクシャクしていて、運動神経に恵まれていないのが一目で分かるタイプだ。とは言え、性格はさっぱりして明るく、見た目とは裏腹に男っぽい気骨の有る奴なので、俺よりもずっと友達は多かったと思う。

寮生の中には、高校時代からの彼女と連絡を取り合っている者もいれば、ちよくちよく他の女子大生と合コンをしている者もいたのだが、どういう訳かこの寮の二階に住んでいる男達は、全くと言っていいほど女に縁が無かった。

ある晩、夕食を済ませた俺の部屋に、両隣の友人達がダベリに来た。酒は禁止されていたので、缶コーヒー、コーラ持参である。一部屋に六人もの男が集まるのだから、むさ苦しい事この上無い。

八号室の柴田二郎という男は、背が高くちょっと外人っぽい派手な顔立ちの男で、着る物に気を使えばカッコ良くなると誰しも思っていたのだが、本人はまるで興味がないようで、いつも同じジーンズにダンガリーのシャツを着ていた。多分、着替えは春夏、秋冬分、一二枚しか持っていなかったのだろう。アダ名が愛用のダンガリーシャツから取られて、ダンになっていた。

同室の四方（よも）武彦は、中肉中背だが武道オタクで、脱ぐとスゴイとダンが言っていた。こいつも、あまり見た目には気を使わないタイプで、年中ジャージを着ていた。夏になると、ダンクトップ姿で額にバンダナを巻いていて、皆にそれとなく、それは止めておけと言われていた。男同士としては面白くていい奴なのだが、男らしすぎて女が引いてしまうタイプである。

十一号室の五嶋雅志は小柄で小太り。ちょっと見は中学生かと思うような童顔だった。顔立ちは、色白で目が大きくマツゲも長く、可愛いと言えば可愛いのだが、中学、高校と女子に色々からかわれる事が多かったらしく、女に対して軽い恐怖心を持っている文学青年だった。こいつも皆に、もっと背が伸びて痩せればなあ、と不憫がられていたくちだ。

もう一人が、五嶋と同室の七尾伊玖磨という背の高い男で、この中では一番お洒落だったと思う。俺達を読まない男性向けのファッション雑誌をいつも買って来て、バイトしてはせっせと服を買う男だったが、いかんせん顔が茄子に目鼻を書いたような三枚目だったので、俺達はよく、その服をダンに着せてやれ、とからかったものだ。

かく言う自分も、中肉中背の目立たない男で、純日本風の地味な顔立ちだ。母親に、お前はムキになると柴犬みたいな顔になるから、あんまり怒るな、と腹の立つアドバイスを貰ったこともある。俺も服に興味が無い以前に金が無かったので、身を飾るなんて発想は頭から無く、取りあえず着る物は清潔であればいい、くらいにしか考えていない、泥の付いたジャガイモのような野暮な大学生だったのだ。

それは、全員目出度く進級も決まって、二年目の春を迎えた頃だった。

我が十号室に六人の男が集まって、コーラやコーヒー片手に大騒ぎしているうちに、部屋の中はどんどん暑く、息苦しくなって来た。文机の前に座っていた俺は、ちょっと腰を浮かして煤けたカーテンを開け、少しだけ窓を開けて空気を入れ替えた。

「この部屋って、通りの向こう側まで見通せるんだな。あっちに商店街があるんだ」

伸び上がるようにして外を見たダンがつぶやいた。

この二階の窓から見える風景は大したものではない。

まず、この敷地を囲む、緑色の金網のフェンスが有り、その向こうは隣家の畑だ。今はまだ何も植えておらず、ただ茶色いパサパサした地面が広がっている。その向こうに幹線道路が通り、その道に沿って小さな商店街が形成されている。コンビニが珍しかった時代なので、夜九時ともなれば店は閉まり、街灯の灯りがボンヤリと下りたシャッターを照らしている。

「見えるよ。八号室って見えないの？」

俺が答えると、四方とダンが頷いた。

「俺らの部屋の窓開けると、すぐ向かいの松の木しか見えねえわ」

「ああ、そっか。でっかい松の木あるもんな」

「僕らんとこの部屋からも、向こうの商店街までは見えないよね？」

十一号室の五嶋が相方の七尾に同意を求める。

「向こう側までは見えないよな。俺らの部屋からだ、向かいの農家の建物に隠れちゃうんだよ。俺、あっちに商店があるなんて、今初めて知ったわ」

「へー、そうなんだ。でも、俺もあっちの商店街って行った事ないよ」

「用事ねえしな。学校行く途中にスーパーあるし」

三沢が興味なさ気に言いながら、膝で歩いて来て、窓から外を見た。

ダンと七尾が立ち上がり、窓を全開にして、本格的に商店街観察を始めた。

「あれは酒屋か？隣は薬局だろうか。自転車屋とかもあるぞ」

「果物屋とかはあんまり用事無いよなあ。まあ薬局は近くにあると、いいかもよ。昼間じゃないと良くわかんねえけど」

三人で、窓から半分体を乗り出して外を見ている。

「わぁ、寒くねえの、お前ら？」

全開の窓から夜気が吹きこみ、部屋の空気は一気に寒くなった。俺はパジャマを着た両腕を擦りつつ、部屋の隅に投げ出してあったカーディガンに袖を通した。

「八重樫、寒がりだな。俺なんか、もう半袖Tシャツで外出られるぞ」と、四方が寝っ転がって笑っている。

「四方君だけだよ、それは。ねえ？」五嶋は座布団の上に、お行儀よく正座している。

「そうだ、お前の代謝は異常だ」

「あれえ、引越しかなあ」

ダンの呟きを耳にして、俺と五嶋、四方も立ち上がって窓の外を見た。窓から六人の男が体を乗り出して、ギューギュー詰めた。危ない事この上ない。

五人の体の隙間から、首だけ出すように外を見ている五嶋が不思議そうに言う。

「もう、十時近いよねえ。引越しなんて、こんな時間にする？」

「赤帽みたいの来てるぞ。なんかいわくつきか？」

「ああ、薬局の二階がアパートになってるんだよ。あそこに入るんでない？」

街灯と軽トラックのライトが、シャッターの下りた薬局の前で行われている小さな引越し風景を、紙芝居のように浮き上がらせていた。そして薬局の二階に、二つ並んでいる窓の左側の方に、ぽっと白い明かりが点いたのが見えた。何せ夜の事だし、畑と幹線道路の向こうの出来事なので、はっきりとは動いている人間の判別は出来なかったが、作業員が二人ほどと、もう一人で荷物を運び入れているようだった。

六人の中で一番視力の良い、四方が力強く一言、言った。

「女だ！」

「ええ？どれ？」

みんな、目を凝らして道の向こうを見たが、年配の作業員二人が、大きな家具を二人で持ち上げ、暗闇に消える様子しか見えなかった。

「今、薬局の左側に行ったの、女だよ。ポニーテールっぽかった。あっちにアパートの玄関が有るんだよ」

「お前、良く見えるな。もう中に入ったんだろうか。あ、二階の窓に人影が見えるわ」

今度はみんなで、二階の左側の窓に注目だ。すると確かに、黒っぽい人影が部屋の中を動いているのが見えたが、窓が磨りガラスなので性別も何も分からなかった。そのまま何となく、俺達は他人の引越しの様子を眺めていたのだが、引越し自体はほんの十数分で終わってしまい、作業員は軽トラックに乗って走り去った。

俺は、さぁオシマイオシマイと言ってみんなを下がらせ、素早く窓を閉めてカーテンを引いた。

七尾がヒョロリと長い体を丸めて、両腕で体を抱いている。

「う～、さむ！体、冷えたわぁ。八重樫、コーヒー恵んでくれ」

お湯は夕食後にポットに入れたら、次の日の朝まで補充出来ない為貴重なのだが、俺は七尾のマグカップにインスタントコーヒーの粉を入れて、小さなポットからお湯を注いでやった。

「ああいうアパートに住んだら、月の家賃ってどれぐらいなんだろうな」

俺が、七尾にカップを手渡ししながら、誰にともなく訊くと、みんな三万前後じゃないか、と曖昧に答えた。

「あの建物、そんなに古くはなさそうだし、六畳一間二点ユニットって感じかなぁ。三万ちょっとくらいじゃないか？」

三沢が缶コーラを飲みながら、少し考え深く答えた。真面目な男なのだ。

「三万か、高いな。俺なら、玄関・トイレ共同、風呂なし六畳一間で二万以下にしたい」と、四方。

「女なら、風呂は欲しいとこだらう。うちの学生かな？ あっさり引越し終わったから、一人暮らしだと思うけど」と、俺。

「そうか、一人暮らしの女か...」

一人暮らしの女、という三沢の言葉に、皆んな何を考えていたのか黙りこんだが、すぐに七尾が混ぜっ返した。

「何だよ、一人暮らしの女なんて、学校になんぼでもいるべや。何を珍しそうに言ってんだよ」

「ふ～ん。七尾君は一人暮らしの女子学生の部屋とか行ったこと有るん？」

「ねえよ。有るわけねえべ！ 学部にもサークルにも女、いねえもん！」

七尾は、普段は標準語を話すように気をつけているのだが、リラックスしている時は、なまりがキツイ。服には凝っても、脱いでしまえば浜のあんちゃんだ。

「そうだよな、学内にいる女学生と話す機会なんて、ほとんど無いよね。ま、ぼくらの場合だろうけど、接点が無いもん」

五嶋が両手でマグカップを包み込むように持って、お茶を飲んでいる。格好だけ見るとおばちゃんみたいだ。

「女なんて、わざわざ話したって何にも面白くないだろう。めんどくせえだけだよ」

「おお、四方は男らしいなあ。全然興味なさそうな割には、さっきえらく興奮してたけど」

誰が興奮してたよお、と言いながら、四方はまた畳にゴロンと横になった。ジャージのズボンに手を突っ込んで、ポリポリ尻をかいている。

「でも、いいなあ、八重樫と三沢は。ここから学生以外の生活風景が見られるんだ」

「おいおい、ダン、何言ってんのお前。バイトするとか外に遊びに行くとかすれば、いくらでも見られるしょ、そんなの」

「俺、そう言うの苦手なんだよねえ、インドア派だから。でも、外から他人の生活を覗き見るって、ちょっと面白いよね」

派手な外人の様な顔で、かすかに笑いながらそう言ったダンに、俺はちょっと引いたけど、皆んなは大笑いしていた。

「まあ、外の生活を垣間見たくなったら、十号室に来ればいって事さ。な？」

四方の無責任な提案に、俺と三沢は顔を見合わせ、勘弁してくれと、寝ている男に座布団をぶつけた。いくら友達でも、そんなにしょっちゅう部屋に居座られたら、邪魔くさくて仕方ない。

しばらく世間話をしていて、時計を見たら十一時近くになっていた。別に部屋の中においては消灯時間などないのだが、そろそろ明日の予習をしたい。三沢も同じことを考えていたのか、もう解散しようや、と言って部屋から皆んなを追い出した。みんなゴネる事もなく、それぞれの部屋に引き上げて行った。

部屋の中に、さっきまで六人もの人が居たのに、急に二人つきりになるとやけに寂しい感じがする。俺は座布団やカップを片付け、文机に向かった。

「三沢、もう寝る？俺、一時間くらい勉強するけど」

「俺も、ちょっとやるわ。読まなきゃならない本も有るし」

三沢は勉強はしっかりするタイプだ。朝の掃除当番の無い日でも早起きし、自習室で勉強している事も多い。

二人で文机に向かってしばらく経った頃、突然三沢が話しかけてきた。

「あれって、薬局の人なんじゃないか？」

「え？誰が？」

勉強に集中していた俺は、最初何の話だか分からなかった。

「引越してた人。薬局に勤める人ならさ、職場のすぐ上で都合がいいだろ？」

「...ああ、まあそうかもしれないけど、そうとも言い切れないしな」

「そうだな。違うかもしれないな」

それきり三沢は話すのを止め、また机の上の本とノートに目を落とした。

こいつ、勉強してると思ってたら、今までずっとそんな事考えてたのか...。少し意外な思いで、俺は三沢の黒縁メガネに被さる長い前髪を、眺めていた。

この出来事の後、本当に両隣の住人が我が十号室を訪れる回数が増えたのには閉口した。それだけではない、堅物で勉強熱心な三沢が、朝、昼、晩と窓の外を気にするようになったのには、呆れると言うより驚いた。向こう側の商店街を見たところで、買い物をする近所の人達がのんびり歩いている様以外、見るべきものは何も無い。何が悲しくて、鄙びた商店街ウォッチングをしなければならないのか？

授業の無い土曜の夕方、俺がバイトから戻って来ると、三沢は部屋で本を読んでいたが、時々ちらちらと窓の外に視線を送っている。俺は少々うんざりして声を掛けた。

「お前さあ、何を期待して窓の外を見てるわけ？そんなに気になるんなら、実際にあそこまで行って来れば？」

「行ったら別に買う物も無いし、あ...」

三沢が突然立ち上がり、窓を開けて外を見つめている。俺も、何かあったのかと思い、三沢の横に立って外を見た。

向こうの薬局から、白衣を着た人が小走りに出てきたと思ったら、すぐ店の左側に曲がって消えた。

しばらくすると、二階の左側の窓に人影が映った。そして、その人は何と窓を開けたのである。

かなり離れているにも関わらず、俺達はその二階の部屋で、白衣を着た人物が歩きまわっているのがはっきり見えたのだ。

三沢が急に俺を振り返り、はじけるような笑顔で言った。

「ほら、やっぱり下の薬局の女の人だよ！！」

キラキラ輝く三沢の細い目を眩しく感じながら、俺はただ、おお、と返事をした。

まだ、そんな事を気にしていたのか、こいつは…。

二階のその人は、窓の近くまで来て何かを探しているようだった。多分、あの窓に面して机か何かを置いているようで、俯いて忙しく手を動かしていたが、そのうち何か本らしき物を手に取ると、窓の外に出してパンパンと叩きホコリをほろった。

三沢が上半身を乗り出し、向こう側の白衣の人を凝視しだしたので、つられて俺も前のめりになる。流石に顔の造作までははっきり分からないが、髪をポニーテールにして、前髪は眉の上あたりでパツンと切っている。その人は、また窓を閉め、手に本を持って小走りに薬局へ戻って行った。ほっそりとしてキビキビした感じの人だった。

俺がポツンと、薬剤師さんなのかなあと言ったが、三沢は何も答えず、ただ凜々しい顔をして、真っ直ぐ向こうの薬局を見つめていた。俺はちょっとだけ、三沢の行動に不安を感じたが、窓を閉めていつもの様に文机の前に座った。

その日の夕食時、三沢と連れ立って食堂に行くと、食事を済ませたダンと五嶋が丸テーブルについて、テレビを見ていた。他にも何人かが、バラバラに席について食事をしている。俺がダンに、そこ空いてるかと言くと、空いてるよと言ってテーブルを布巾で拭いてくれた。俺達は配膳カウンターに行き、賄いのお婆ちゃんから、ボリューム不足の焼き鳥定食をトレイに乗っけてもらい、ダン達のいる席に着いた。

焼き鳥定食とは言っても、タレを絡めた貧相な鳥串が二本しか付いていない。あとはキャベツばかりなり。

「焼き鳥串じゃなくて、鶏皮串だよな、これ」

ゴムのような鶏肉を噛みながら、お婆ちゃんに聞こえないよう小声で愚痴る。

「まだマシだよ。昨日、肉じゃがが切れた後に来た奴は、メインディッシュが目玉焼きに変更だったそうだ」

「晩飯に目玉焼きかい？ヒドいな、そりゃ」

「ところでさ、あとで十号室、行っていい？」

「あ、ぼくも！」

「又、シャッターの下りた商店街ウォッチングかよ。夜更けのもの寂しい風景をそんなに見たいか？」

「ふふ、まあ、商店街は二の次なんだけどな。人の出入りが見られればいいんだよ。それに、今日はこれがあるんだ」

ジャン！と言いながら、ダンがジープンの後ろポケットから取り出したのはオペラグラスだった。カシャン、と軽い音を立て、ダンの手の中で平たいオペラグラスが立体に変形した。

五嶋が、それを見てクックッと笑っている。

「ダンがさ、後輩から百円で買ったんだよ、それ。今日、学校でもずっと覗いてたんだ」

「お前、止めろよー、本格的に覗きなんてしたら、犯罪者だぞ」

俺は呆れ果てた。ここの寮生が覗きなんてしていると噂でも立ったらエライ事だ。しかも、俺の部屋からとなれば、必然的に疑われるのは俺と三沢じゃないか。

「まあ、まあ、堅いこと言うな、八重樫。俺としては、あのアパートの二階の人が、男か女かだけでも分かればいいんだ」

「それは...女だよな？」

俺が三沢に同意を求めると、あいつは苦々しそうに口をへの字に曲げ、無言で頷いた。

五嶋とダンが驚いた顔をし、へー、顔見たの？と俺達に尋ねる。

「見たっちゃ見たけど、遠すぎて分かんねえよ。四方が言ってたポニーテールの人だよ。白衣着て、薬局を出入りしてたから、あそこで働いてるんだよ。なあ？」

三沢に再度同意を求めると、いよいよ不機嫌な顔になり、今度は頷きもしない。

「えー、じゃあ、俺も顔見たい」

「ぼくも見たい」

「馬鹿じゃねえのお前ら。そんなに見たいんなら、直接店に行って、オロナインでも買ってこいって」

「もう、それじゃあ面白くないんだよ、分かってないなあ八重樫君は。暗いこちらの部屋から、道を隔てた向こうの明るい部屋を想像する事が楽しいんだよ」

ロマンなんだよなあ、と言いながらダンがオペラグラスをカシャカシャと開いたり閉じたりしている。

「変態か？それにブスかもしれないぞ。当たり前だけど、俺達より年上だぞ？それでもいいの？」

「まあ、兎に角後で行くから、早く飯済ませるよな」

ダンは俺の肩をポンと叩き、お湯の入ったポットを持って五嶋と食堂を出て行った。

「まーったく、おかしくねえ？あいつら。でも、ブサイクな女だったら、覗くのやめるよな、きっと。いっそ、はっきり顔見せてくれないかなあ」

俺が冗談めかして笑いながら言うと、ずっと下を向いて飯を食べていた三沢が、急に顔を上げて言った。

「あの人は美人だ！」

三沢の目に怒りの炎がチラチラして、俺の笑顔は引きつって固まった。三沢の分厚い汚れたメガネのレンズを通して、あんな遠くにいた人の顔がはっきり判るとは思えない。俺は恐る恐る聞いてみた。

「...お前には、あの人の顔がはっきり見えたわけ？」

「きれいな人だった！」

あまりにもキッパリした言い方に反論する事もためらわれ、俺はただ、そうか、と言って、食事を続けた。
...これは、もしかして恋なのか...？

夜八時頃になって、予告通りダンと五嶋がやって来た。手ぶらで来ては悪いと思ったのか、ポテチと缶コーヒーを差し入れてくれた。

「七尾と四方はまだ戻ってないの？」

「七尾君はバイト。四方君は実験で居残ってるんじゃないかな」

三沢はいつもと違って、今晚は少し大人しいのだが、ダンも五嶋ものんびりした明るいタイプなので、その辺の事には気が付かないらしかった。

「じゃあ、八重樫、三沢、早速で悪いが電気消していいか？」

「え？何で？」

こっちが明るかったら覗いているのが外から分かるだろ、と言いながら、ダンが天井のサークルライトの紐を引っ張って灯りを消した。

寮のこちら側は周りが畑なので街灯も無い為、普段なら真っ暗になるのだが、今夜は空が晴れて月が明るく、月光の白い光が部屋に差し込み畳の上にくっきりと四人の男の影を作った。

「マジかよ！本格的に変態だよ！気持ち悪いよ！」

まあまあ、と言いながら、五嶋が月明かりの中でポテチの袋を開けている。ダンは構わずカーテンを開けて、窓ガラス越しの商店街ウォッチングを始めた。

「あそこの薬局って八時閉店だから、今くらいが狙い目だって四方君が言ってたんだ」

五嶋がポテチをパリパリ食べながら言う。こいつは、三沢やダンほど窓の外の世界には思い入れは無いようだ。ただみんなと遊んでいただけなのだろう。

「四方が？あいつも二階の人に興味有るのかな。七尾はどうなの？」

「七尾君、バイトで忙しいからねえ。バイトしすぎて、最近授業サボってるみたいよ。そっちの方が大問題」

「そりゃ大問題だ」

俺も五嶋と一緒に、ポテチをつまみながら缶コーヒーを飲む事にした。

三沢は、窓の前に立ってオペラグラスのスタンバイをしているダンの側に座り込んで、やはり窓の外を見ている。

「お、店仕舞いだ」

ダンの言葉に、三沢のみならず俺と五嶋も反応して、座ったままの体勢で窓の方のにじり寄って行った。商店のほとんどは、これくらいの時間に閉まるようで、既にシャッターが下りた店も多かった。例の薬局も明かりを消えている。その内、薬局の出入口からコートを着た年配の男性と、同じくらいの背丈の人が出てきた。

夕方に見たポニーテールの人で、白衣ではなく暗い色のセーターと、黒っぽいパンツを着ている。二人はこちらに背を向けたまま、しゃがみ込んで玄関のドアに鍵をかけ、軽くお互いに会釈して別方向に歩き出した。

「横顔見えるか？」

オペラグラスを覗いているダンに聞いてみた。

「うー、見える事は見えるけど、暗いし歩いているから...ああ、角、曲がっちゃったあ」

三沢も真剣な目をして見つめているのが、後ろ姿越しにも分かる。しばらくすると、二階の左側の窓がガラリと開いた。いつの間にか俺と五嶋も立ち上がって、二人の隙間から窓ガラスに顔をくっつけるようにして、向こうを見つめていた。

ポニーテールの人が窓から顔を出して天を仰ぎ、つかの間煌々と輝く月を眺めた。ほんの数秒、我々に横顔を見せていたが、すぐに窓を閉めてカーテンを引き、ややしばらくして、カーテンの隙間からほんのりと明かりが漏れてきた。

「ハイ、終了、終了。今晚の興行はこれにてオシマイです」

俺も窓のカーテンを引き、サークルライトの紐を引っ張って灯りを点けた。みんな眩しそうに目をしばたいている。

「どう？オペラグラスで顔見えた？」五嶋がダンに聞く。

「うーん、見えたけど、動いてたし暗いから良く分かんわ。不細工って事はないと思うけど...胸は無いなあ」

「え？そうなの？」

畳にあぐらをかいて、缶コーヒーを手に持ったダンが、両手で胸の辺りをジェスチャーで示す。

「横から見たら、こうストーンて感じ」

「おお～！」俺と五嶋が仰け反って呻く。

「ほっそりしているんだから、仕方ないじゃん！」

三沢が文机を背中に慥然と呟いた。三沢は貧乳好きかあ、と笑いながら、ダンが三沢にポテチと缶コーヒーを勧めた。三沢がパッと顔を赤くして缶コーヒーを受け取り、慌てたようにプルトップを開けてコーヒーを飲んだ。

その夜、俺は布団の中で、月光に浮かぶあの人の白い横顔を思い出そうとしていた。何の接点も無い大人の女に、みんな妙に興味をそそられている。これは一体どうした事だろう。

八号室の柴田二郎

どうして通りの向こうに垣間見える、薬局の女性が気になるのか自分でも分からない。自分の身近にいないタイプの人だから興味をそそられるのかな？やっぱり、手の届かない他人の生活を覗くってのが淫靡で面白いのかも。

みんなには内緒だが、今日は授業が早く終わったので、一人であの薬局の前まで行ってみる事にした。薬や化粧品の広告がベタベタ貼られたガラスの引き戸の向こうに、髪が薄くてメガネを掛けた、年配の男性が接客している様子が見えた。客のおばちゃんはカウンター前に置かれたパイプ椅子に腰掛け、目の前に置かれた幾つかの薬の箱を手にとって見比べている。

あのじいさんが店主なのかなあ、と思いながら店内に視線を巡らせると、その男性の後ろにドアの無い小部屋が有り、その中で白衣を着た人物がチラチラするのが見えた。

ああ、あの人だろうか、と入り口のガラスの引き戸の向こうから凝視していたら、店の男性と目が合ってしまった。メガネの奥から上目遣いにじっと見られて俺はドギマギし、知らん顔をして通り過ぎた。

白衣を着ているところを見ると、やはり薬剤師なんだろうか。薬剤師と言えば、けっこうな高給取りのはずなのに、なんでこんな学生アパートみたいな所で一人暮らしをしているんだろう？あのじいさんとの関係はどうなんだろう？

俺はぐるりと遠回りして寮に帰る途中、色々な空想にふけてしまった。それはもう、ちょっと人には言えないような空想だ。だから、これは自分の胸の内にしまっておこう。そうだ、今日は早く帰れたから久しぶりに洗濯しなきゃ。

そして、ふと自分のアダ名の事を考えた。ダンガリーのダンって、どうなのよ、と。

十一号室の七尾伊玖磨

朝飯を食って部屋に戻ると、五嶋がもう出るところだった。俺は今日の午前中の講義が休講になったので、少し部屋でのんびり出来る。たまには一人を満喫したいじゃないか。五嶋はキチンとしたタイプなので、毎日、布団を押入れから出し入れしているが、俺は面倒なので万年床だ。

布団に寝そべてタバコに火を付け一服する。勿論、寮では喫煙飲酒は禁止されているが、ルールを守らない奴は多い。ここの階には、たまたま同期と後輩しかいないので気が楽だ。

春めいて来て、埃っぽい窓の外に目をやるが、見えるのは相変わらず農家の建物だけで殺風景なもんだ。あいつら、まだ商店街ウォッチングやってんだべか…。

布団に座りなおし、五嶋の文机の方を見ると、机の上に積んである本とノートが一番下に、便箋らしきものが見えた。

便箋つー事は、手紙だよな。あいつ手紙書く相手なんかいるんか？

俺はためらう事なく、五嶋のノートの下にあった便箋を引っ張り出した。表紙をめくって見ると横書きの便箋に書いてあったのは、アニメっぽい画風の、白衣を着たポニーテールの女のイラストで、漫画にあるようなフキダシに何やらセリフが書かれている。

とても…ヘタだった…。それはもう、小学生並の画力だった…。

俺は見てもいけないものを見てしまったと思い、元通りに丁寧に便箋をノートの下に収めた。

五嶋よ、何かお前間違ってるぞ、と思いながら。

十号室の三沢貴明

講義の無い平日の午後、八重樫がいないので、俺は一人、自室の窓の下に座って、ぼんやり向こうの商店街を眺めている。自習室に居る時や八重樫が部屋に居る時は、頑張らなければいけない気がして勉強に熱も入るのだが、なぜだか一人でこの部屋にポツンと居ると、何にもやる気が起こらないのだ。だからと言って、薬局の二階に引越しをしてきた女の姿を期待して、窓から離れられない自分は、矢張りちょっとおかしいのかもしれない。

背がスラリと高い細身の女だ。白衣が似合うという点も、ポイントが高い。俺は巨乳好きじゃないから、胸が小さくても気にしない。髪型もいい。俺は長い髪が好きなんだ。出来れば、あのポニーテールをほどこいて欲しい。八重樫に、あの人は美人だと言い切ったのは、自分でも論拠に欠けると思わないでもないが、俺はどちらかと言うと、顔は普通でもスタイルの良い女の方がそそられるからいいんだ。

そうだ、俺は正しい。あの人は美人だ！

そう考えると急にダンの奴が妬ましくなる。あいつ、オペラグラスなんか持って卑怯じゃないか。俺よりずっと視力がいいくせに、その上あんな物使って、なのに良く見えなかったとはどういう事だ！？ちょっとぐらい貸してくれても良さそうなものなのに！

そこで俺はハッとした。ダンの奴、確かにあいつは男前だ。本人が気づいていないだけで、磨けば光る珠なのだ。

今度の事が切っ掛けで、あいつが自分を磨き出したら、もう俺達に勝ち目は無い(少なくとも見てくれは)

ふと、俺の髪はどうなっているんだろうと考え、伸び過ぎた前髪を引っ張った。朝、洗面所で顔を洗う時もほとんど自分の顔なんか見ないので、頭髪がどんな形になっているかすら、自分で良く分かっていない。確か、最後に髪を切ったのは去年の夏休み前だった…。

「床屋に行こう！いや、び、美容院へ行こう！」

俺は財布を握り締め、ジャンパーを引っ掴んで部屋を出た。

十一号室の五嶋雅志が、図書館でレポートを書いているうち、すっかり日が暮れてきた。そろそろ寮に帰って晩ご飯を食べないと、食堂に行ったら白飯が無いという不運に会うと思い、鞆に本やノートを詰め込んで図書館を出た。

学校から寮まで十五分くらい歩くのだが、住宅地なのでこれと言って寄り道して楽しい場所などなく、一軒だけ、一階が食料品売り場で二階が年配者向きの普段着と下着などを売っている、小さなスーパーマーケットのような店が在った。寮の学生達も、食料が足りない時や下着類などはここで調達していた。

ああ、ソックスを買わなきゃと思ってたんだ。

五嶋は道すがら、主婦達でそれなりに賑わっているその店に入り、正面玄関脇の、店のサイズには不相应な広い階段を上がって、紳士物のコーナーに向かった。お洒落な服など置いているわけもないので、ほとんど若者の姿を見ることのないコーナーである。

五嶋も、そんなに服にお金を掛けるタイプでは無いが、流石にここで服を買うのははばかれる。ネズミ色のポロシャツや、茶色のゆったりしたズボンなどを横目に見ながら、靴下のコーナーを探した。

七尾君は、ソックスだってこんな所じゃ買わないんだろうな。でも、鴨居に掛けて有る変な色のジャケットとか、一体どこで買って来るんだろう？肩パットが入ったダブルのジャケットなんて、僕には絶対似合わないし着ないから、まあ別にいいんだけどね…。

七尾のファッションセンスは、どうなんだろうと思いながら、三足千円の靴下を選んでいると、すぐ脇を見慣れた人物が通り過ぎた。相手の方は気が付かなかったようで、五嶋が顔を上げた時、その人物は既に背中を見せて向こうに行ってしまった。

その男は、八号室の四方武彦だった。

いつものジャージにスニーカーで、両手をズボンのポケットに突っ込んで、だらしなくガニ股歩きしている。

四方君も買い物か....

声を掛けようとした時、四方は濃紺に黒いラインの入ったジャージを手に取り、体に合わせて鏡を見ようとしていた。

四方君、君はこれからもずっと、ジャージしか着ないのかい...？

声にならない問いかけを胸に秘めたまま、五嶋は三足千円の靴下を持ってレジに向かった。

八号室の四方武彦が、新しいジャージを買って寮に戻り、玄関脇の名札を引っ繰り返して、在室の目印の赤い面に変えた時、隣に掛けられている柴田二郎の札は既に赤かった。

階段を上がって、自室のドアを開けるとダンはいなかったが、鞆や本などが文机の前に散らかしてあるので、居ることは居るようだった。四方は早速、新しいジャージを袋から出し、今着ている黒いジャージを脱いで濃紺の新品に着替えてみた。

「うん、うん、いいねえ。これから暑くなるから、これくらい薄っぺらくて安いのが一番だ」

次いで下の方も着替えていると、ダンが洗濯カゴを持って部屋に戻ってきた。おう、ダン...、と言った後、四方はジャージの下を、尻の辺りまで引っ張り上げたまま言葉に詰まり、ダンを上から下まで眺め、また上下一周して眺めた。

「お、四方、新しいジャージ？」

ダンが洗剤類の入ったカゴを三段ボックスの上に置いて、爽やかに聞いた。

「う、うん。...お前、何でダンガリー着てないの？下も、それジーパンじゃないよな？」

「そう、今日買ってきた。上はね、ネルシャツ。下のは、これチノパン」

ネルシャツとチノパンを順に指で引っ張って、丁寧に答えてくれた。

「は?!」

「チノパン」

「いやいやいや、ええーっ?!何で、何でよ?!違うだろ!ダンがダンガリーじゃなくてどうすんのよ?!」

四方はジャージの下を引っ張り上げるのを止めて、両手をぶんぶんさせている。

「ん?ダンがダンガリーじゃなくて、ダンガリーのダンだろ?あ、じゃあ俺、これからネルって呼ばれちゃうのかなあ、はははー」

ダンは屈託なく笑っている。

「それ着たら?晩飯食いに行こうや。なんか、洗濯機回るのじーっと見てたら腹減っちゃった」

座布団に座って、マイ箸とマイポットの用意をしているダンの背中を見ながら、四方は信じていた友に裏切られたような気がして切なかった。

...お前がずっとダンガリーとジーパンだから、俺もずっとジャージで行けると思っていたのに...

四方はゆっくりとジャージの下を腹まで引っ張り上げ、その薄っぺらい生地を撫でて溜息をついた。

十号室の八重樫浩司が、食堂で五嶋と晩ご飯を食べていると、見違えるように垢抜けたダンと浮かない顔をした四方が入って来た。

「ど、どうしたダン？イメチェン？」

びっくりして、口からご飯粒を飛ばしながら尋ねる八重樫に、ダンはいまね、と笑って箸をテーブルに置き、配膳カウンターに向かった。四方がちょっと悔しそうに顔を歪め、小声であいつ色気づいちゃってよーと呟き、箸を置いてダンの後を追った。

「わあ、ダン君、服を変えるとやっぱりカッコイイね。モデルとかやれそう」

「ほんとだなあ、あと髪型だけ整えたら完璧だなあ」

八重樫はダンがカッコ良くなるうとダサいままだろうと、別にどうでもいいのだが、何となく今まで横並びだと思っていた六人が、本当はそうではないらしいと言うことに、今更気づいた事が新鮮だった。

ダンが自分の見かけを気にし出したのは、やっぱりあの薬局の人の存在が関係しているのだろうか？そう言えば、今日は三沢の帰りが遅いな、いつもならこれくらいの時間には戻ってるのに、と八重樫が寂しいおかずをつつきながら考えていると、突然食堂の窓ガラスを、雨が音を立てて打ち始めた。

「あ、降り出した」

向かいに座った五嶋が顔を上げて窓の方を見、八重樫も釣られて振り返る。ダンと四方が、定食のトレイを持ってテーブルについた。

「おお、こりゃ土砂降りになりそうだ。俺達、明るいうちに帰って来てて良かったな」

「ホントだ、俺、ついさっき帰ったところだ」

「三沢がまだなんだよなあ。あいつ、傘なんか持ってないだろうから、濡れるべなあ...」

ザーザーと流れる様に窓を洗う雨の動きを見つめながら、八重樫は何だかモヤモヤと嫌な予感がした。

その頃、三沢貴明は寮に帰る為にバスに乗っていた。

初めて行った美容院で、どんな感じにしますかと若い女性美容師に尋ねられた時は、上がってシドロモドロになってしまったが、何とかヘアカタログの中から適当なものを見繕って仕上げてもらった帰りだ。

流石にいきなりパーマをかけるのは怖かったので、前髪は少し長めで後ろは短く刈った今どきのアイドル風になる予定だったのに、仕上がりは見せてもらったヘアカタログの写真とは大分違う。

それが美容師の腕のせいなのか、自分の髪質のせいなのかは分からないが、よろしいですか、と訊かれて素直にハイと返事をして、床屋の散髪の倍の金を払ってきた。

何か納得いかねえ....。

バスの窓ガラスに映った自分の頭を見ながら、すっきりしない気持ちでいたら、ポツポツとバスの窓を雨が打ち始めた。なんて最悪、セットした髪が崩れるし、短くなった髪のせいで首もとが寒い、と三沢は自分のツイてなさにゲンナリした。

最寄りのバス停で降りた時、雨足は勢いを増して容赦なく三沢の体を打ち、一分もしないうちに帰宅を急ぐ三沢はずぶ濡れになった。春の強い雨は冷たく、ジャンパーの襟元から水滴が、さっぱりした襟元から首筋に流れこんで三沢はその冷たさに震え出した。

さ、寒い！冷てえ！体が冷え切って風邪を引いちゃう…。土砂降りの中を小走りで急ぐ三沢は、そこでハッと閃いた。

そうだ、風邪薬を買おう！

財布の中には、まだ二千元ほど金が残っている。風邪薬は多分千円程度だろう。寮に薬箱は有るから、常備薬は無くては何かなるのだが、風邪薬くらい手元にあったっていいじゃないか。三沢は雨の中を駆け出した。

三沢は寮に行く道を一本通り越して交差点を渡り、いつも自室の窓から眺めていた、あの商店街へ向かった。時間はまだ七時前なので、商店街はまだ明るい、急に降り始めた雨のせいか、路上を歩く人はまばらだ。

目指す薬局がすぐに見えてきた。明るい店内と自分のずぶ濡れの姿を考えると一瞬躊躇したが、勢いをつけて三沢はそのガラスの引き戸を引いた。ピンポンとチャイムが鳴る。

いらっしやいませ、と年配の男の声が聞こえたが、三沢にはボーッとした像しか見えていなかった。

外は大雨で寒く、メガネには水滴が付いている。そして店内は暖房が効いていて暑いくらいだった。息急き切って駆けてきた三沢のメガネは一瞬にして真っ白に曇り、彼の目には明るい店内にボンヤリ浮かぶ、白い人影しか映っていなかったのだ。

おおっ、ヤバい！何にも見えんわ！

はずむ息を整えながら、仕方なく三沢はメガネを額の上へずり上げ、店内をキョロキョロと見回したが、残念ながら彼の目は、強度の近視の上にキツイ乱視で、メガネをはずしたらはずしたで、やはり色の付いた何かが存在するという程度の認識しか出来なかった。

カウンターの向こうのもやもやした人物が、かすれた声で心配そうに言った。

「お客様、これはひどく濡れてしまいましたねえ。大丈夫ですか？」

声の主が、この店の店主らしい男性だとは分かったが、三沢のボンヤリした視界には、他に人らしいものは見えなかった。

何だよ、本当に今日はツイてない…。

泣きたい気分になったが、こういう店に入って何も買わずに帰る事が出来るほど、三沢は強気な人間ではなかった。顔に付いた水滴を拭いながらカウンターの前に立った。

「あの一、風邪薬が欲しいんですが...」

「はい、はい。今、何か症状が出てますか？」

まだ出てねえよ、出るかもしれないから買うんだよ、と腹立たしく思ったが口には出さずに、適当な事を言ってしまうおうと思った。

「えっと...。頭が痛くて、少し熱っぽいんですよね...」

「そうですか、では総合感冒薬がいいかもしれませんねえ」

店主はガラスのショーケースからいくつかの風邪薬を出して、目の前に並べて見せ、顆粒とカプセルは効きが早いとか、錠剤は安めとか説明してくれたが、三沢にはもうどうでも良かった。

錠剤の安いのを一個頼むと、はい、ありがとうございますと白い紙袋に入れてくれた。

三沢はメガネをオデコに上げたまま、店主の後ろにある小部屋に目を凝らすと、白衣を着た人物がチラリと見えた。

ああ、あの人だ！こっちに出てきてくれ、と念じたが、中で何か作業をしているらしく出てくる様子はない。

髪の毛の先から滴り落ちる水滴を、ジャンパーの袖で拭きながらお金を払い、残念な気持ちのまま踵を返すと、店主の男性が声を掛けた。

「ちょっと待って。雨ひどいから傘持って行って下さいな。使わないのがあるから」

すぐ近所だから要らないと言おうとしたが、その人は奥の小部屋の方に向かって言った。

「お~い、悪いけどね、使っていないビニール傘が裏に有るから取ってきてくれないか。お客様に上げるから」
向こうで、はい、という小さな声が聞こえた。

三沢の心臓がドキンと跳ね上がった。

おおっ！チャンス！いよいよ近くで顔が見られる！

跳ね上がった胸のドキドキが耳の中に響いてウルサイくらいだ。

しばらくすると、あのポニーテールの人がニコヤカに傘を持って小部屋から出てきた。

ニコヤカに...多分...三沢の裸眼では全然見えていなかったけれど、多分、愛想良く出て来たに違いないのだ。

店主は傘を受け取ると、はいどうぞ、返さなくてもいいですよ、と透明なビニール傘を手渡して寄越した。

ああ、出来ればあの人から受け取りたかった…。

三沢は何とか顔を良く見ようと、おかしいくらい目をしかめてその人の顔を凝視したけれど、どうしても顔に目鼻がついてる、という程度の認識しか出来なかった。美人かどうかはもとより、年の頃さえ判別出来ない有様だ。

しかしながら、いつまでもここにいるわけにもいかず、三沢は拳動不審な笑顔を浮かべ、消え入りそうな小さな声でありがとうございますと礼を言い、ギクシャクと店の引き戸を開けた。

またピンポンとチャイムが鳴り、お大事に一、と二人の声が背中の方でハモっていた。

三沢はビニール傘を開いて、トボトボと寮に向かった。

見えたけど…、会えたけど…、と咳きながら。

虚しい気持ちで寮にたどり着き玄関に入ると、一階の食堂から笑い声が聞こえてきた。八重樫や四方達の明るい声だ。三沢は、借りた傘を傘立てに突っ込み、三和土のスノコの上でびしょ濡れになった靴下を脱いだ。そのまま食堂に顔を出して、定食を頼もうかとも思ったが、みんなの陽気な声を聞いたら、逆に顔を合わせるのが億劫になり、そのままスリッパをつっかけ二階の部屋に戻った。

びしょ濡れのジーパンとジャンパーを脱いでハンガーに掛け、靴下は洗濯カゴの取っ手に並べて置いた。朝使って干しておいたタオルで、濡れた頭をゴシゴシ拭きながら、部屋着のセットに着替えた。

乾いた柔らかな服に着替えたら、少しは気分も軽くなり、自分の箸とポットを持って階下の食堂に向かった。

食堂のドアを開けると、今までテレビを見ながらゲラゲラ笑っていた友人達が、突然笑うのを止めて三沢の顔をじっと見た。

ああそうだ、俺、髪切ったんだっけ…。

「へえ、三沢もイメチェンかぁ」

「さっぱり切ったなぁ」

皆んなが目を丸くして、口々に言った。三沢は、あまりつついて欲しくないのに、俯きがちに、うん、とだけ答えた。

「今日のおかず、何？」

「鰯の干物、ポテサラ、わかめと大根の味噌汁」

ちなみに、梅干、漬物、海苔の佃煮は常備されている。三沢はポットと箸をテーブルに置いて、定食を取りに行った。

「なんかアレだ、誰かに似てる。誰だっけ？」

四方が目を細めて三沢の背中を見ながら呟いた。

「誰？芸能人？」と五嶋。

「ホラあの、えー、上を向いて歩こうを歌ってた...」

「え？坂本九？いや、そっれはないべや。似てねえって！」

「カワイソ過ぎるよ～」

三沢は八重樫達が楽しげに話しているのを背中中で聞きながら、何だか皆んなと距離が出来たような気がして、また少し気分が暗くなった。皆んなは明るい太陽の下にいるのに、自分だけが暗い雨雲の下でじっとり濡れているような気分だった。

愛想の無い賄いの老婆に定食をもらい、沢庵を数切れ白飯の上に乗せてテーブルに戻ると、八重樫と五嶋が席を立つところだった。

「三沢、雨に降られて濡れたんだろ？早く風呂入ってあったまった方がいいぞ」

「うん、食ったら入るわ」

じゃあな、と二人は食堂を出て行った。テーブルには四方とダンが居残っていたが、改めてダンを見て三沢は何だか違和感を感じ、彼の姿を上から下まで眺め回した。

「こいつもイメチェンなんだよ。何だかなー、みんな」

四方がダンを指差し不満そうに言ったので、ようやく三沢はダンの服装がいつもと違うのに気づいた。

「ああ、そうか。ダンガリー以外の服着てるの、久しぶりに見たような...。ネルシャツなんて、持ってたっけ？」

ダンは、青と白のグラデーションになった、チェックのネルシャツを撫でながら、今日買ってきたんだ、とニヤニヤ笑いながら言った。

「結構いいよ、ネルシャツ。柔らかくて肌触りいいさ。チノパンもはいてて楽だわ。三沢も思い切って髪型変えたなあ？」

「うん、かなり伸びて鬱陶しかったし、時間あったから切ってきた」

「いいよ、似合うよ、なあ？」

「まあな、俺は男の髪は短い方が好きだ」

褒められて恥ずかしくなり、下を向いて食事に集中しようとしたら、思わずクシュンとくしゃみが出た。

「お、風邪か？風邪引いたんなら、俺らが風邪薬買って来てやるから言えよ」

四方がニヤニヤして言う。

「いらねえよ」

鼻水をすすりながら、鰯の干物を食べる。三沢は、いつものクタクタのダンガリーシャツと、擦り切れたジーパンから脱皮したダンの前で、あの薬局で風邪薬を買ってきたとは言えなかった。

八重樫が、もう寝ようと自習室から自室に戻った時、三沢は風呂から戻ったところで、シャンプーの爽やかな匂いをまき散らしながら、カットしたばかりの髪をバスタオルで拭いていた。

髪が短くなったせいで、今までより頭が大分小さくなったように見える。

外は相変わらずの土砂降り、流石にこんな夜には商店街ウォッチングをする者もなく、二人とも大人しく押入れから布団を出した。

布団に潜り込んだ三沢が、クシュンとくしゃみをして、鼻をすする。

「風邪？」

「いや、それでも…。大丈夫…」

「季節の変わり目って、風邪引き易いからなあ」

八重樫も布団に潜って目覚まし時計のアラームをセットしていると、メガネをはずした三沢が話しかけてきた。

「あのさあ」

「うん？」

「コンタクトっていくらくらいするんだろうな？」

「コンタクト？コンタクトレンズ？」

「うん、メガネって不便なんだよな、雨降りとか雪の日は。曇るし、水滴つくし」

「さあ、俺は分かんねえけど、二数万くらいじゃねえの？七号室の村上って、確かハードコンタクト使ってるって言ってたから聞いてみたら？」

「そうだなあ、でも高いなあ。ちょっと買えないか…。もう電気消していい？」

「いいよ」

三沢が手を伸ばして、照明の紐を引っ張って灯りを消した。

コンタクトって…不便ってだけじゃなく、やっぱり三沢も外見を気にしているのだろうか。

ダンに続いて变身しようとしている三沢の事が、八重樫はちょっと心配だった。

陽性で元々見かけの良いダンはともかくとして、生真面目で不器用な三沢が、見ず知らずの女性に片思いして、おかしな方向に走らなければいいが、と。

一夜開けた朝、三沢はガンガンする頭痛で目が覚めた。どうも本格的に風邪を引いたらしい。午前中から講義があるので、無理矢理に体を起こして着替えていると、八重樫もモソモソと起きだした。

お互い寝ぼけた声でおはよう、と言い、各々朝の支度を済ませる。

洗面所に行って顔を洗い、三沢は鏡に映った自分の髪を改めて見てみたが、カットした時と一晩寝て起きた今と、何だか全然印象が違う。寝ぐせで、あちこち好き勝手に跳ねている毛先に水を付け、あまり使っていなかった櫛で整えたが、どうもカッコよくはならないようだ。諦めて洗面所を出て、一度部屋に戻ってから食堂へ向かった。

食堂のドアの前で会った寮生に、おはよう、と声を掛けられたので、おはようと挨拶を返すと、あれ、鼻声だねえと言われた。

ちょっとな、と返事をして中に入ると、席の半分ほどは既に埋まっていた。いつもテレビの近くに陣取る四方が、こっちこっちと三沢を手招きした。八重樫と五嶋も既に来ていて、カウンターの前でトレイを持って並んでいる。三沢も、テーブルに箸を置いてから列に並んだ。

しかし、並んでいるうちに、全然食欲が無い事に気づいた。胃の辺りがムカムカして気持ちが悪く、白いご飯が喉を通る気がしない。しかし、何にも食べずに登校するわけにもいけないので、ご飯少しでいいですと、老婆に声を掛けてトレイを出した。

先に席についた八重樫が、三沢のご飯茶碗のご飯の少なさに気づき、具合悪いのかと聞いた。

「う～ん、何かムカムカする。熱は無いと思うけど」

「学校、行けるか？」

「行く。午前中の講義、出ないと後が面倒になるし…」

「あんまり具合悪くなったら、早退して病院行けよ」

「そうだなあ…」

三沢の元気の無いのを見て、他の者もいつもより静かに朝食を食べ、またそれぞれの部屋に戻って、学校へ行く準備をしたり、寝直したり、談話室に駄べりに行ったりした。

三沢は午前中の講義は何とか受けたものの、胃のムカムカが収まらない為、学食でお昼を食べる気にはなれず、午後から出る予定だったゼミは休み、売店でパンと牛乳を買って一人寮に帰る事にした。

朝食の後、例の風邪薬の錠剤を飲んだのに、何だかさっぱり効いた気がしない。

風邪じゃないのか？いや、風邪だろう。病院行くほどじゃないと思うから、早く帰って寝てしまおう。

今までは首が隠れるくらい長かった髪を切ったせいで、首筋がスカスカと寒い。ジャンパーの襟を立て、顔をうずめるようにして、はぁはぁと熱い息を吐きながら三沢は道を急いだ。

寮に戻ると、買って来たパンと牛乳の簡単な昼食を済ませてから薬を飲み、すぐに布団を敷き替えて床に入った。寒気がして顔も熱っぽかったが、布団に入って体が温まるとしだいに眠くなり、そのまま夕方までぐっすり眠った。

ドアがバタンと開いた音で目が覚めると、八重樫が部屋に入って来ていた。最初は威勢よく入って来たが、三沢が寝ているのを見て、急に足音を忍ばせて抜き足差し足になり、そーっと三沢の顔を覗き込んだ。三沢は布団に潜ったまま、真っ赤な顔をして、おう、とだけ声を出した。

「寝てた？熱上がってきてんの？」

「う～ん、計ってないけど、多分…」

「管理人室に行って、体温計借りてくるわ。冷たい水、飲む？」

「ああ、わりい。頼むわ」

八重樫は鞆を部屋に置くと、自分のポットを持って階下の管理人室に行き、救急箱の中から体温計を借りた。

「あの～、頭痛薬以外に風邪薬、ないっすかねえ？」

五十代半ばの小柄な男性管理人に尋ねると、申し訳なさそうに頭をかきながら言った。

「いやあ、悪いねえ。ちょっと前に切れたんだわ。明日で良ければ買ってくるよ」

「あ、いいです。誰か持ってるかもしれないし」

管理人室を出て食堂へ行き、流しで自分のポットのぬるくなったお湯を捨てて水を入れ、共有の冷蔵庫から氷を三つ四つ出してポットに入れた。蓋を閉めていると、食堂に鞆を斜めがけしたダンがやって来て、う～す、と声を掛けてきた。今日もネルシャツとチノパンだ。

「三沢、風邪で寝こんでるさ」

「え～、マジ？夕飯、食べられるかな。婆ちゃんにお粥頼んでおくか？」

「そうだなあ、後で本人に聞いてみる」

ダンが冷蔵庫から自分のコーヒー牛乳のパックを取り出し、八重樫と一緒に二階へ上がった。

三沢が体温計で熱を計ってみると、三十八度五分あった。どうりで喉が渇くわけだと、八重樫がマグカップに注いでくれた水を一気に飲みすると、タオルを首に巻いて再び布団に潜り込んだ。

「晩飯食べそう？婆ちゃんに、お粥かおじや作ってもらうか？」

「うん、出来れば…。胃がまだ気持ち悪い」

「そっか、じゃあ頼んでおくわ。お前、薬とか飲んだの？」

「うん、飲んだんだけど、何か、あんまり効いてない気がする」

三沢は布団の脇においてあった、瓶入りの錠剤を見せた。

「ああ、それ、あんまり効かねえんだよなー」

「ホント？失敗したなあ」

「まあ、明日、明後日は休みだし、ゆっくり寝てれ。誰か胃に優しい風邪薬持ってねえか聞いてみるわ」

「ありがとなあ…」

三沢は母親以外の人間に、こんなに優しくしてもらった事は初めてだったので、内心とても感動していたが、照れ臭いので鼻の上まで掛け布団を引っ張り上げて目を瞑った。

八重樫がもう一度食堂に行き、賄いの老婆に風邪っぴきが一人いるので、お粥かおじやを作ってくれないかと頼むと、じゃあ卵を入れたおじやを作ってくると、意外に快く引き受けてくれた。礼を言って食堂を出ると、階段の上にダンと五嶋が立っている。

「何でこんな所で立ち話してんの？」

「お前を待ってたんだよ。談話室に四方と七尾もいるから、ちょっと来いよ」

「えー、珍しいな、この時間に全員勢ぞろいなんで」

「いいから、いいから。あ、三沢君には内緒だからね」

二人に引っ張られて、八重樫は自分の部屋を通り越して談話室に入った。ここは、勉強以外で寮生の親睦を図る為に用意されている部屋なのだが、二階にあるせいか、どうしても一階の住人より二階の住人の方が利用率が高い。

どこからか貰ってきたらしい、古い擦り切れた布張りのソファセットとコタツ、座布団、日焼けした古い漫画の詰まった本棚が有るだけの八畳ほどの殺風景な部屋だ。

ソファに四方と七尾がふんぞり返って座っているだけで、他には誰もいない。両脇でニヤニヤしているダンと五嶋の顔を交互に眺めて、ははあ、こいつら何か悪いこと考えてるな、と八重樫は思った。

八重樫が四方達の向かいのソファに座り、ダンと五嶋も、それぞれ空いているソファや椅子に腰掛けた。

「何、何？何を企んでんの？」

八重樫が不敵に笑っている正面の二人に訊くと、七尾が床に置いてあったビニール傘を掴んで八重樫の目の前に掲げた。

「ジャ～ン！」

「何だよ、その傘？」

横に座ったダンが、七尾から傘を受け取って、その握り手の部分を八重樫に見せた。そこには消えかけてはいたが、黒いマジックで薬局の名前が記されている。

「あれ？これって、向かいの薬局の？」

四方と七尾が、満足そうにイヤラシイ笑みを浮かべた。

「みんなの意見から察するに、昨日の晩から傘立てに有ったそうさ。って事は、昨日の夜、あの薬局に行って、傘を借りて帰って来た奴がいるって事だな？」

キョトンとしている八重樫に、四方が探偵よろしく説明を続ける。

「昨日、寮生の中で、傘を持たずに出かけ、雨の中を帰って来た奴は一人しかいないんだよ！」

「ああ…」

合点がいった八重樫は、三沢が見せてくれた錠剤の風邪薬を思い出した。

なるほど、そう言う事か。身だしなみを整えようと髪を切りに行って雨に降られ、思い切って薬局に行き風邪薬を買い、傘を借りて帰って来た。

それで、雨の日のメガネは不便ってわけか。それじゃあ、あの人の顔は良く見えなかったに違いない。しかし、風邪薬を買いに行き、風邪を引くとは、つくづく運の無い奴…。

「それで、何？お前ら、何する気？三沢は風邪で寝こんでるんだから、ほっといてやれよ」

傘を床に置いたダンが、にっこり笑って八重樫の肩を叩いた。

「いや、俺達は三沢を応援しようって事になったんだよ」

「応援？」

「みんな、あの人の事は興味有るけど、やっぱり一番熱心に見えるのは三沢君じゃない？だから、ダンも三沢君に譲るって」

五嶋の言葉に八重樫が吹き出した。

「譲るも何も、顔も名前も知らない相手じゃないか。何、言ってんだよみんな。応援だってやりようが無いだろう？それとも、三沢にダンのオペラグラスでも上げるわけ？」

「あ、それもいいね」

「ダメだよ。あれ、結構気に入ってんだから」

「じゃあ、どうすんの？ラブ・レターでも渡す？」

「あ、それもいいね」

「冗談だよ。既婚者かもしれないのに、マズイだろ？」

「そう！それだよ！」

七尾が人差し指を八重樫に突きつけて言った。

「何が、それ、だよ。人、指差すの止めるよ」

「だから俺達で、あの人の、人となりをリサーチしようって話さ」

「リサーチ？」

どうやら八重樫以外のメンツで、話はとうにまとまっているらしい。

七尾が話を続ける。

「うぶな三沢の事だから、昨日せっかく薬局行ったのに、ろくに顔も見てきてねえと思うんだわ。俺らで行ってよ、幾つくらいの人か、独身か、あと、身長、体重、スリーサイズをリサーチしてやろうってわけだな」

「まあ、見た目での判断だけだな」

四方がしたり顔で言う。

「お前らもひまだねー。それ、みんなで薬局に押しかける気なわけ？」

「この人数で押しかけるのはマズイベや。だから、二三人で、回数を分けて行ったらどうかって話よ。行けば居るってわけでもないみたいだし」

「そう、俺も店の前まで行った事あるけど、居なかった」

「え？ダンも行ったの？」

「へへ～。ジイさんに睨まれちゃったよお」

「まあ、そう言うわけで、このプロジェクトの第一弾としてだな、三沢の風邪薬を買いに行く名目で、明日の昼にでも早速第一陣を派遣しようと思っているんだが、八重樫はどうする？参加する？」

四方は既に参謀気取りで八重樫に聞いた。

「俺？俺は…」

みんなが八重樫の顔を見つめている。

「やる！」

力強い八重樫の返事に、全員がニンマリと笑った。

こんな面白そうな事に、参加しないわけにはいかない。八重樫も、あの人がどんな人なのか知りたいのだ。

そうだ、是非、知りたい！

八重樫も、ニヤリと笑った。

次の日の朝、三沢は大分熱は下がってきたものの、代わりにひどく咳が出るようになってきた。汗まみれのパジャマが気持ち悪く、半袖シャツとスエットの下に着替えて、脱いだパジャマを洗濯カゴに突っ込み、八重樫が食堂から持ってきてくれた、おじやと漬物を食べ、薄い番茶で薬を飲んでから再び布団に潜った。

布団の中でタオルを口に当てて咳をしていると、まるで昔の肺病病みのようだなどとポーッとした頭で考えている。

今日は土曜で、ほとんどの講義は休みだから、八重樫も朝食後しばらくは部屋で何かしていたが、ついさっき、出かけるわと行って部屋を出て行った。

八重樫に風邪が移らなきゃいいけど、と思いながら、また三沢はうつらうつらしてきた。

もう季節は春から初夏へ向かっており、窓から入る日差しが暑く感じる事さえある。こんなに良い天気でも休みなのに、風邪で動けないなんて最悪だ。そう思いながらも、三沢は次第に気持ちの良い眠りに落ちて行った。

八重樫は部屋から出て、示し合わせてある集合場所の談話室へ行った。ソファにはダンと四方が既に待っていて、コタツ席では他の寮生が二人、碁を打っている。

よお、と八重樫が二人に声を掛けると、おうとかうーす、とかはっきりしない返事が帰ってきた。五嶋と七尾がいないので、聞いてみる。

「十一号室は？」

「あいつら、今日は掃除当番」

「あ、そっか。あのな、三沢、今日は咳がひどいよ」

ソファに座って八重樫が言うと、ダンが同情して顔を歪めた。

「咳って体力落ちるんだよな。そんじゃ咳止め買ってきてやるか。あとマスクとか」

「そうだなあ」

しばらく三人で雑談していると、五嶋と七尾がニコニコして入ってきた。

「悪イ悪イ。風呂掃除、やっと終わったべや」

「お待たせ～」

「お疲れさ～ん。じゃあ、揃ったところで、早速今日の計画を立てようぜ」

四方がテーブルにノートを開いて、シャーペンを構える。

「いちいち、書かんでも…。まあ、いいけど。じゃあ、買うのは咳止め系の風邪薬とマスクな？金は五人の割り勘でいい？」

八重樫の言葉に、全員がウンウンと頷く。

「で、誰が行く？」

「分けて行くべ？風邪薬班とマスク班にして、あんまり立て続けだと怪しいから、ちょっと時間差で」

「いい、いい！そうしよう。二、三に分けて行こう」

「よし、それではアミダで」

早速、四方がノートにアミダくじの線を引き始めた。皆んな小学生のいたずら小僧のような顔をして、ヒヒと笑いながらそれを見ている。

「最初に薬を買うのが三人な…で、その少し後で…マスクを買いに二人…と…さ、名前書いて、線、足せ」

アミダの結果、先に行くのが八重樫、五嶋、ダン、第二陣が四方と七尾になった。第一陣に名前が入らなかった四方が、不満足そうではあったが張り切って仕切り始めた。

「よし！今回のミッションは、皆んな分かってるな？あの人の、人となりを観察してきて報告。その後、データを突き合わせて考察の上、それとなくヤツに諦めた方がいいか、アタックすべきかを伝える、アタックする時は必要なデータを提供すると。どう？」

ダンがクスクス笑いながら、ま、いんじゃないの、と言った。皆んなニヤニヤ笑いが止まらない。

「僕達、第一陣が薬買った後ね、ここに戻って交代する？それとも、どこか外で集まる？」

五嶋が童顔の丸顔を紅潮させて、四方に尋ねると、皆んな周りを見回して、ここはちょっとなあ、と言葉を濁した。他の寮生に聞かれるもよろしくないし、あそこから寮へ戻って交代するのも面倒だ。

「あ、あの商店街の端に公園、在るよ」

「ああ、ダンはその辺、歩いた事あるんだっけ」

「そうそう、あの薬局を通り越して何件か先かな。橋の手前に、結構キレイに整備された公園が在るんだよ。あそこで待ち合わせるってどう？」

「そうすっか。今日は天気もいいし、公園で日向ぼっこもいいかもな」

「よし。じゃあ、三人が任務遂行までは残りの二人は公園で待機。三人が仕事を終えて公園に来たところで、二人が出陣って事でいいな？」

「ラジャー」

四方が時計を見て立ち上がった。

「ターゲットは朝九時開店なので、もう開いているぞ。早速、作戦開始だ」

全員が立ち上がって、各々ガッツポーズを構えた。

よし！行こう！三沢の為に！いや、俺達の為に！

五人は意気揚々と寮を出て、あの薬局へ向かった。空は雲一つ無い鮮やかな青空で、風も無い暖かな日であった。ものの数分で、例の薬局の前に着いた一行は、八重樫、五嶋、ダンを残し、四方と七尾が目で作戦遂行を訴えて公園へと去って行った。

「じゃあ、行くか」

八重樫の言葉に、緊張した五嶋とダンが頷く。八重樫が薬局のガラス戸を引くと、ピンポンとチャイムが鳴った。例のごとく、カウンターには初老の男性店員が立っていて、来客にいらっしゃいませ、と愛想良く声を掛けた。三人は、素早く店内に目を走らせたが、他には店員も客もいない。

...いないのかな？...

三人が、お互い目で問いかけていると、その男性が、何をお探しですか、と尋ねてきた。仕方が無いので、八重樫がその男性の前に進み出て、薬の相談をする。

「あの～、友達が風邪を引きましてですね、その、咳がひどいんで、何か薬を、と思ひまして...」

「おや、そうですか。お友達思いですなあ。熱は無いんですか？」

「えっと、ちょっと有るみたいです。風邪薬は飲んでるけど、咳が止まらないって。あ、それと胃の調子も良くないって言ってます」

「あ～、じゃあ、胃に優しい薬で咳止めがいいかな」

「はあ...」

八重樫が応対して貰っている間、五嶋とダンは、のど飴などを物色しながら、カウンターの奥に在る小部屋の中を伺っていた。

「あそこって調剤室なんじゃない？」

「そうだな。ここ、調剤薬局だもんな。きっと中で仕事してんだよ」

小声で話していると、案の定小部屋の奥に白衣を着た人物の背中がちょっとだけ見えた。

「いた、いた！」

「こっち、来ないかな？」

店員が、薬を二つほど出して、ガラスのショーケースに並べている時、二人は八重樫に、目と指先で「あっちに、いる！」と知らせた。

八重樫は、分かったと言うように頷いたが、この後どうしたら良いか分からない。上の空で薬の説明を聞いていた八重樫は、仕方無く効きが早いと言われたソフトカプセルの方を一つ頼む事にした。

ダンが、のど飴を一つ持ってきて、これもお願いしますー、とショーケースの上に置いた。八重樫が財布から金を出しながら、ダンに聞いた。

「これも買うんか？」

「ま、ついでにさ。後で精算しよ」

年配の店員は、薬とのど飴を紙袋に詰めながら、ニコニコ笑っている。

「仲がいいんだねえ。皆さん、近くの大学寮に住んでる学生さん達かい？」

「はい、そうです」

「そうかい。じゃあ、お友達が早く元気になるように、ちょっとサービスさせて貰おうかな」

三人が、サービスって何だろうと思っていると、その人は奥の調剤室に声を掛けた。

「ちょっと、こないだ届いたサンプル用の栄養ドリンク持ってきてくれないか？」

はい、と声がして、ガサガサと何か探している音がする。

思いがけない展開に、三人はそれぞれ輝くような笑顔を浮かべ、内心ガッツポーズを取っていた。

ただ、ちょっとだけ、違和感を感じたけれども、その時はテンションが上がっていて、そんな些細な事はすぐ頭から消え去り、大きく目を見開いて調剤室から白衣の人が出てくるのを、今か今かと待っていた。

そして、その人は現れた。

ガラス瓶の栄養ドリンクを二本手に持ち、笑顔で言った。

「店長、これでいいですか？」

「ああ、それぞれ、この学生さんのお友達が風邪引いたって言うから、サービスだよ」

白衣でポニーテールの方は、そうなんですかぁ、とニコニコ笑っている。それは人好きのする、とても爽やかな笑顔だった。

八重樫と五嶋とダンは、目をまん丸にして、その人の顔を穴が開くほど見つめていたが、ハッと八重樫が我に返った。

「あ、ありがとうございます。お、お幾らでしたっけ？」

アタフタと精算をしている横で、五嶋とダンが腑抜けた様子で啞然とし、お互いの顔を見ている。

買い物を済ませ、引き戸を開けて外に出ると、後ろで、ありがとうございましたー、と二人の声がハモっていた。

店の外に出た八重樫と五嶋、ダンは、堅く口を結び、無言で顔を見合わせると、突然ダッシュして待ち合わせ場所の公園へ突っ走った。

「ダメだ！ダメだ！ダメだ！ダメだ！」と叫びながら。

公園のベンチに腰掛け、七尾はプカプカとタバコを吸っている。四方は遊具のパンダに跨り、空手の型を練習していた。砂場で遊んでいる子供が二人いるが、それぞれ自分の世界に没頭しているようで、何の会話も聞かれない、静かな土曜の公園だった。

そこに息せき切った男子大学生が三人走りこんで来て、静寂は破られた。砂場の子ども達はその勢いにビビって、ちょっと腰を浮かした。

三人のただならぬ様子に、四方がパンダから下り、四方もベンチから立ち上がった。

「な、何だ？ どうした？」

「ダメだ！ダメだ！あれはダメだ！」

薬局から戻った第一陣の三人が、息を切らせ、むせながら、口々にアレはダメだアレは違う、と叫んでいる。

さっぱり要領を得ないので、四方が両手を広げて、ちょっと落ち着け！と言った。

「何がダメなんだよ？一人ずつ分かるように言えよ！」

息を整えて、八重樫が代表して言った。

「アレは、男だよっ！！」

「え？」

「え、じゃねえよ！男だよ！お・と・こ！ポニーテールの男！ちょっと女っぽいけど、お・と・こ！誰だよ、最初に女だって言ったの？！」

ぜえぜえしながら五嶋が四方に畳みかける。

「よ、四方君だよ！引越しの時、女だって言ったの？」

「ええ??ちょ、でも俺、あの時一回しか見てないし...みんな、今まで観察してて...」

皆まで言わないうちに、七尾が四方の腕を引っ張って駆け出した。

ダンがベンチに座り込み、続いて五嶋も横に座って足を投げ出した。

「参ったなー」

「...ホント、とんだ勘違いだね」

「まあ、灯りの無い夜に、遠目で見たら分かんないかもなあ...」

「そりゃ、胸も無いさ、なあ」

ダンが可笑しくなってきたのか、ははは、と笑い出した。

その人は、ほっそりしたなで肩の若い男で、柔和な顔をしていた。声も柔らかく、遠くから聞けば、まんざら低めの女性の声と思えなくもない。しかも、紛らわしい事にあの髪型だ。遠目に女と間違えられても仕方ないだろう。

しかし、男は男だ。六人ともそっこの気は無かったので、いかに感じが良いとは言え、これはもう対象外だ。

この何週間かの騒動とワクワクの顛末がこれかと思うと、可笑的いやら馬鹿馬鹿しいやら。それでも三沢の純情を考えると、八重樫は笑ってばかりもいられないなあと思った。

三人がベンチで休んでいると、何分もしないうちに七尾と四方がつまらなそうな顔をして帰って来た。

ダンが、見てきたか?と聞くと、七尾が半笑いの顔で言った。

「いや~、実に爽やかな好青年だったな」

四方は固く腕組みをして、とても不服そうだ。唇を付き出して文句を言う。

「何だよ、あの髪型!?ポニーテールで前髪パツンって何だよ?薬剤師で男ならスポーツ刈りだろ!」

「ま、兎に角、全ては俺達の勝手な思い込みだったってわけだ」

七尾が八重樫に、マスクが入った紙袋を渡した。

「三沢には、お前から上手く言っといてくれや」

「うわ~、俺、なんて言ったらいいんだよ?あいつ、結構本気だぞ。コンタクトにしようか、とか言ってたんだぞ!」

「そのうち、笑い話になるって」

七尾は笑いながら、ブランコに飛び乗って立ちこぎを始めた。ダンも七尾の横のブランコに乗って遊び始めた。四方は、七尾のタバコを一本貰って一服し、五嶋はベンチに座って日向ぼっこだ。

やれやれ...

八重樫は両手に薬局の紙袋を持ったまま溜息をつき、やおらパンダに跨って、遠くに少しだけ見える、寮の屋根を眺めた。

午後になり、三沢が空腹を感じて目を覚ますと、枕元に咳止め、のど飴、栄養ドリンクにマスクが置いてあった。

部屋を見回すと、八重樫が窓の下の壁にもたれて本を読んでいる。

「八重樫、これ...？」

三沢が咳止めの箱を持って、八重樫に尋ねると、彼は本から顔を上げないまま静かに答えた。

「ああ、それ皆んなからお見舞い。良かったら飲んでくれ」

「悪いなあ、気ィ使わせて...。これって、あそこの薬局で買ってきたのか？」

「...うん、そう」

一眠りして大分気分が良くなったのか、三沢が布団の中で少し体を起こして聞いた。

「あのぉ、...あの女の人のいた？」

「うーん、それがさぁ...」

八重樫は顎をこすりながら、顔をしかめて窓の方に視線を泳がせた。空気は乾き、顔に当たる午後の日差しは強く暑い。

眩しい陽光に目を細めて、八重樫はどこから話したものだろうか、としばし考えた。

この作品はブログ「[白嘘物語](#)」に連載していた小説を、加筆修正したのですが
尾崎士郎の「惜春夜話」にインスパイアされて書いた短編小説です。

尚、ブログは2011年12月に移動しました。

新しいブログはこちらになります「[白嘘物語-つくもうそ物語](#)」

「行く春を惜しむ」

<http://p.booklog.jp/book/21878>



2011年3月3日

著者：葉山ユタ

ブログ：「[白嘘物語-つくもうそ物語](#)」

ツイッター：http://twitter.com/#!/Yuta_Hayama



感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/21878>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/21878>

Copyright Y u t a H a y a m a All Rights Reserved